

# 橋本竹下「同先生分詠三国人物」について

鷹 橋 明 久

橋本竹下「同先生分詠三国人物」（先生と<sup>とも</sup>に三国の人物を分詠す）は『竹下詩鈔』の上巻所収。『三国志』に登場する六名の英雄・豪傑を取り挙げ、七言絶句で詠じたものである。題名にある「先生」とは、頼山陽のこと。『頼山陽詩集』巻十八（文政八年（1825）の項に、「詠三国人物十二絶句」（三国の人物を詠ず十二絶句）があり、「先主（劉備）」、「孔明」、「関羽」、「張飛」、「趙雲」、「本初（袁紹）」、「孟徳（曹操）」、「仲達（司馬懿）」、「荀彧」、「仲謀（孫権）」、「周瑜」、「管寧」の十二名について七言絶句で詠まれている。注には「客歳十一月、尾道ニ在リ、橋本竹下ト共ニ、コレヲ分詠シ、今、ソノ完稿ヲ見タルナリ」とあり、竹下の「同先生分詠三国人物」が附されている。竹下は、「玄德（劉備）」、「孔明」、「子龍（趙雲）」、「仲謀（孫権）」、「公謹（周瑜）」、「仲穎（董卓）」を詠じており、「仲謀（董卓）」について

では、山陽との合作とされている。よって、竹下が詠んだ六名は、全て山陽も詠んでいることになる。これは当初、山陽が尾道に滞在した折に、『三国志』に登場する十二名の英雄・豪傑を設定し、竹下と一緒ににまず、「仲謀（董卓）」について詠んだ後、六名づつ分担（「仲謀」は、竹下の担当に入れる）を決め、各々が別々に詠んだものを、後で一揃にまとめて共作にしようと考えていたのではないだろうか。しかし、山陽は自らの担当分だけでは飽き足らず、竹下の分にも手を出してしまった（竹下に模範を示そうとしたのか？）ので、竹下が詠じたものと重複してしまったと思われる。

広島県立文書館に収蔵されている竹下の「従甲申（1824）冬至乙酉（1825）仲夏」の詩稿に『竹下詩鈔』巻上所収の「同先生分詠三国人物」は見られることから、甲申（1824）十二月（「仲謀」の詩は十一月）

から乙酉（1825）仲夏にかけて作成されたもの（竹下三十五〜三十六歳頃）と考えられる。以下、「同先生分詠三国人物」に注釈を行う。（原文の右に附した記号の○平声、●は仄声、◎は韻字を表す）

〔一〕玄德

英雄却自被人猜  
何幸轟轟天畔雷

英雄は却て自ら人猜を被る  
何ぞ幸なるや轟轟たる天畔の

休道使君遅見事

道ふを休めよ使君 事を見るに

一時瞞過老瞞来

一時 老瞞を瞞過して来る

※この第一首について、頼山陽は「第一首一字不可易。雖華人不多讓也」（第一首は一字として易ふ可からず。華人と雖も多くは譲らざるなり）と評する。

【校勘】「何幸轟轟天畔雷」は「従甲申（1824）冬

至乙酉（1825）仲夏」の詩稿（以下「詩稿」に統一）は「解事轟轟天畔雷」とする。

【押韻】猜・雷・来（上平声十灰韻）

【語釈】○人猜 猜疑心 ○轟轟 大きな物音が轟くさま。 ○天畔 天边 ○使君 劉備のこと。

『蜀志』先主伝に「曹公從容謂先主曰、今天下英雄、

惟使君与操耳」（曹公 従容として先主に謂ひて曰く、今天下の英雄は、惟だ使君と操なるのみ）とある。○老瞞 曹操の幼名は阿瞞と言った。この時、曹操はもちろん幼くはないので、老瞞と表現した。

劉備が曹操の客卿であったとき、両雄酒を酌み交わし、曹操は「天下の英雄は君と我のみ」と言った。劉備は本心を見抜かれたと驚き、箸を地面に落としてしまったが、にわかに雷鳴が轟き、自分は雷が苦手だと言いつくろつた。臆病を装って曹操の自分への疑念を払拭したという故事（『三国志』劉先主伝 裴松之注引『華陽国志』）を用い、見落としがちな劉備の凄みについて巧みに表現している。頼山陽が詠じたものを以下に挙げる。

先主

長腕雙垂閑不勝  
結髻織屨枉多能  
幢幢一樹柔桑緑

長腕 雙垂 閑に勝えず  
結髻 屨を織るも枉げて多能  
幢幢（車の幌） 一樹 柔桑の

展到蜀山青萬層

緑 展がりて蜀山に到り 萬層青し

【押韻】勝・能・層（下平声十蒸韻）

篠崎小竹は、「玄德不爲子成罵。亦多幸」(徳 子成(頼山陽の字)の罵と爲らず。亦た多幸)と評している。

【二】孔明  
觀破金刀運欲終

金刀の運 終はらんと欲るを觀破し

茅蘆避世隱耕農  
襄陽老子何饒舌  
又送風雲攪臥龍

茅蘆に世を避け 隠れて耕農す  
襄陽の老子 何ぞ饒舌たる  
又た風雲を送り 臥龍を攪す

【校勘】なし。

【押韻】農・龍(上平声二冬韻)

【語釈】○觀破 「觀」はいねがい望むの意、よつて「觀破」では意味が通らない。「看破」であれば、平仄も変わらないのでよいと思われるが、なぜ「觀破」にしたのか不明。○金刀運 漢王朝の運命。劉を分解すると、卯、金、刀となる。○茅蘆 茅葺きの廬。○耕農 百姓の仕事。○襄陽老子

襄陽(荊州)に住む水鏡先生、司馬徽。『三国志』

諸葛亮伝引『襄陽記』に、劉備が司馬徽に世間のことを質問したところ、司馬徽は「儒学者や俗人どもに、いったい時局の要務がわかりましようか。時局の要務を識る者こそ英傑です。このあたりにもとも

と臥龍と鳳雛がおります」と言った。劉備が誰かとたずねると、「諸葛孔明と龐士元です」と答えた、とある。○饒舌 おしゃべりな様。○臥龍 見前注。

劉備が襄陽(荊州)で劉表の客卿だったとき、水鏡先生(司馬徽)に会い、臥龍(諸葛孔明)の存在を知る。孔明は乱世を避けて、襄陽郊外で農耕に勤しんでいたが、劉備は三顧の礼を以てこれを迎える。『三国志』諸葛亮伝)

次に頼山陽が詠じたものを挙げる。

孔明  
有魚頼尾泣窮冬

魚有り頼尾(赤い尾) 窮冬(陰

涸轍無人憐唵囁

暦十二月)に泣く  
涸轍 人の唵囁(魚が水面に浮

かび出て呼吸する)を憐れむ無

誰料南陽半溝水  
養渠忽地化爲龍

誰か料らん 南陽 半溝の水  
渠に養はれ 忽地として化して

龍と爲るを

【押韻】冬・囁・龍(上平声二冬韻)

篠崎小竹は、「半溝水恐泛。子成定不安」（半溝の水は泛ばんことを恐る。子成定めて安ならず）と評している。

〔三〕趙雲

膽満全身足護劉  
一刀辟易萬豺貅  
懷中活得真龍肉  
誰料佗年安樂侯

膽は全身に満ち劉を護るに足る  
一刀辟易す 萬豺貅  
懷中に活かし得たり真龍の肉  
誰か料らん 佗年の安樂侯

※この第三首について、頼山陽は「第三首亦妙想妙句。卓然可伝」（第三首も亦た妙想妙句。卓然として伝ふ可し）と評する。

【校勘】「辟」字を詩稿は「避」とする。

【押韻】劉・貅・侯（下平声十一尤韻）

【語釈】○膽満全身 劉備が趙雲のことを、「一身これ胆なり」と評したことをいう。 ○劉 劉備の子阿斗。後年、蜀の後主となる。 ○辟易 勢いを恐れて尻込みをする。 ○豺貅 勇猛な軍隊。 ○

懷中活得 趙雲は劉備の子劉禪を鎧の懷に抱いて奮戦し、敵陣を脱出した。 ○真龍肉 真龍（劉備）の子、劉禪。 ○安樂侯 劉禪は後年魏に投降し、安樂公に封ぜられた。「公」は脚韻の都合上、「侯」

とした。

魏との戦いで趙雲は劉備の子阿斗（後の蜀の後主劉禪）を鎧の懷に抱いて戦場を駆け回り、決死の勇を奮って助け出したが、後年、その劉禪はあっさりと魏に降り、安樂公に封ぜられ、文字通り安樂に過ごした。趙雲の苦勞が水泡に帰したことを風刺している。

頼山陽作は以下の通り。

七尺彭亨膽満身

七尺の彭亨（氣が壮健なさま）

誰知鎧縫舍郎君

誰か知らん鎧縫（鎧の縫い目）

刀邊一塊收龍肉  
留續岷峨半段雲

刀邊に一塊 龍の肉を収め  
留まりて岷峨（岷山と峨眉山）  
に續く 半段（半分）の雲

【押韻】君・雲（上平声十二文韻）

〔四〕仲謀  
未必獅兒勝髯郎

未だ必ずしも獅兒は髯郎に勝た

波○濤○洶○湧○舊○金○湯○  
試○看○烏○鵲○南○飛○翼○  
不○度○吳○江○天○塹○長○  
波○濤○は○洶○湧○す○  
試○み○に○看○よ○  
度○れ○ず○  
吳○江○天○塹○の○長○き○を○

【校勘】詩稿では「何必」、「誰渡」になっているが、  
山陽が「未必」「不渡」に改めている。

【押韻】郎・長・湯（下平声七陽韻）

【語釈】○仲謀 吳の孫權のこと。 ○猗兒 凶暴

な犬。吳の孫策（孫權の兄）のこと。『三国志』孫

策伝注引『吳歷』に「曹公（曹操）聞策平定江南、

意甚難之、常呼猗兒難与争鋒」（曹公（曹操）は（孫

策の江南を平定するを聞き、意 甚だ之を難じ、常

に猗兒は与に鋒を争ひ難し、と呼ぶ）とある。原典

によれば孫策を指すが、ここでは、孫權を意味して

いる。 ○髯郎 曹操をいう。『三国演義』第一回

に「身長七尺、細眼長髯、官拜騎都尉、沛国譙郡人也。

姓曹名操字孟德」とある。 ○洶湧 わきたつ様子。

○金湯 金城湯池。堅固な城塞。 ○烏鵲南飛

南（吳の国）に向かって飛んでいくカササギ。曹操「短

歌行」に「月明星稀、烏鵲南飛。繞樹三匝、何枝可依」

（月は明らかに星は稀に、烏鵲南に飛ぶ。樹を繞る

こと三匝、何れの枝に依る可き）とある。 ○吳江

長江をいう。 ○天塹 天然の堀。

赤壁の戦いで孫權は曹操を破ったが、必ずしも自  
力で勝ったわけではない。曹操は赤壁の戦いの前夜、  
「烏鵲南飛」と詩を詠んだが、その烏鵲も結局は吳  
を流れる長江を渡ることができなかった。そこは、  
自然の要塞であり、曹操は長江に敗れたのだ、と詠  
じている。

山陽作を次に挙げる。

○仲謀  
生子當如孫仲謀○

○不關天塹護金甌○

○可憐卻被曹瞞餌○

○力竭荊襄斗大州○

子を生まば當に孫仲謀の如くあ  
るべし（『三国志』吳主伝に見

られる曹操の言）

關はらず 天塹（揚子江をいう）

金甌（外侮を受けたことのない

完全無欠な国家）を護るを

憐れむ可し 卻つて被るは 曹

瞞の餌（関羽と孫權を戦わせた

ことか？）

力は竭く 荊襄（荊州と襄州）

斗大（一斗升ほどの大きさ）の

【押韻】謀・甌・州（下平聲十一尤韻）

小●濟●  
喬○濟●  
夫○吳○  
婿●臣○  
比●盡●  
肩○傑●  
稀◎姿○

濟濟たる吳の臣いんと盡く傑姿

小喬夫婿比肩稀

なり

東風逐はず  
中原の鹿

東風不逐中原鹿  
赤壁焚舟徒爾歸

赤壁に舟を焚き  
徒爾らに帰る

【校勘】なし。

【押韻】稀・帰（上平声五微韻）

【語釈】

○公謹 呉の重臣周瑜。赤壁の戦いで曹操を敗退させた。  
○済済 威厳があつて厳かなさま。 ○呉

臣 呉の孫権の家臣。○傑姿 突出した容姿の人  
物。○小喬 周瑜の妻。大変な美人で、『三国志

『演義』には、曹操は赤壁の戦いで勝利して、小喬と大喬（孫策の夫人）を手中にしたいと考えていた、とされている。○夫婦 夫。「小喬夫婦」は、す

なわち、周瑜（公瑾）。

○東風『三国志』周瑜伝

引「江表伝」には「蓋先取輕利艦十舫、載燥荻枯柴積其中、灌以魚膏、赤幔覆、建旌旗龍幡於艦上。時

東南風急、因以十艦最著前、中江拳帆、蓋拳火白諸校、使衆兵齊声大叫曰「降焉」。操軍人皆出營立觀。去北軍二里余、同時發火、火烈風猛、往船如箭、飛埃絕爛、燒盡北船、延及岸边營柴。瑜等率輕銳尋繼其後、雷鼓大進、北軍大壞、曹公退走」とあり、「東南風」が吹いたとしているが、ここでは「東風」に改め、これを詩語としている。○中原鹿「中原逐鹿」で、中原（中国の中央部）で群雄が帝位を争うことをいう。○徒爾帰「徒爾」は、いたずらに、むだに。

呉には傑物が多いが、周瑜に肩を並べられる者はいない。その周瑜も赤壁で大勝したが、魏軍の舟を焼いただけで（曹操を追撃する途中、負傷したため、曹操を捕らえることもできず、蜀の諸葛孔明には南郡と荊州、襄陽を奪われる）、天下を争うまでに至らなかった。周瑜は赤壁の戦いの後、まもなく病死する。

山陽が詠じたのは次の詩。

周瑜

東風燒盡北軍船  
烟滅長江不見痕

東風は燒盡す北軍の船

長江を烟滅するも痕を見ず

怪得頻頻曲辺顧

怪しみ得たるは、頻頻として曲

還無一顧向中原

辺を顧るも  
還ほ一顧して中原に向かふ無し

【押韻】痕・原（上平声十三元）

〔六〕仲穎

臍燈寧恨伏天刑

臍燈 寧ぞ恨まん 天刑に伏す

萬古難堪遺臭腥

萬古 堪え難きは 遺臭の 腥

郿隄縱能營兔窟

郿隄 縱に能く兔窟を營む

不生千里草青青

生ぜず 千里の草の青青たるを

【校勘】なし。

【押韻】刑・腥・青（下平声九青韻）

【語釈】

○仲穎 後漢末期の武将董卓。後漢の靈帝死後の政治的混乱に乗じて、政治の実権を握り、一時は朝政を掌握するほどの権勢を得たが、暴虐非道の限りを尽くしたため、諸侯及び朝臣の反感を買い、最期は養子の呂布に殺害された。○臍燈 『三国志』董卓伝注引『英雄記』に「董卓の屍は市場にさらされ

た。董卓は肥満体であつたため、そのあぶらが流れ出て地面に染み、草が赤く変色した。董卓の死体を見張っている役人は、日が暮れると大きな灯火を作り、董卓のへその中においてともしびとした。灯りは朝まで消えず、このよにして何日も経過した」とある。○郿隄 地名。陝西省郿県の北。後漢の初中、董卓、隄を郿に築き、号して万歳隄と称す。『三国志演義』第八回に、「長安城から二五〇里離れたところに、二十五万人の工夫を役役して、「眉隄」を築いた。その城壁の高さは厚みは長安城とまったく同じであり、内部に建造された宮殿や倉庫には二十年分の食料が貯蔵されていた。民間から選んだ八百人の年若い美女をここに置き、数え切れないほどの黄金・宝玉・絹織物・真珠がうずたかく積まれていた」とある。○千里草青青 『三国志』董卓伝引「英雄記」に、「時有所言曰、『千里艸、何青青、十日ト、猶不生』」（時に謠言有りて曰く、『千里の艸、何ぞ青青たる、十日トするも、猶ほ生ぜず』とある。すなわち、これは董卓の死を暗示した歌。董卓の「董」字を分解すると、「艸・千・里」となり、「卓」字を分解すると、「ト・日・十」となる。

董卓の軍は長安に入って略奪、婦女暴行、殺人と蠻行の限りを尽くした。また、董卓は少帝を廃して陳留王を帝位にすえ（献帝）、自分は相国となり、何太后の毒殺など暴虐の止まるところを知らなかった。ついに王允の計略により、呂布が惨殺。路上に放置された死体の膺に立てた蠟燭は翌日まで消えなかったという。

以上、橋本竹下の「同先生分詠三国人物」を見てきたが、この作品は、従甲申（1824）冬至乙酉（1825）仲夏の詩稿の中に見られ、広島県立文書館に所蔵されている竹下の詩稿（最初期と思われるのは、庚辰（1820）詩稿）の中でも初期のものであると言える。

漢詩を作成する上で、最初に取り組むべきとされる七言絶句を用いて、中国文学で最も馴染み深い『三国志』に登場する英傑を詠じるというのは、まさに漢詩の初学者が行うことであろう。橋本竹下はこの頃より、漢学の巨匠、頼山陽から漢詩を学び始めたのではないだろうか。作品中（其三、其四、其五）に史実とは異なる詩句を用いながらも、押韻や平仄の決まりは決して破綻していないことから、この詩の作成の主眼は、三国の英傑を詠じることより、

むしろ漢詩（近体詩）の規則を厳守することにあつた。また、この作品の制作こそが「禽蟲詩詠晉人物」（拙稿 尾道市立大学芸術文化学部紀要第17号掲載）の構想へとつながっていったのではないだろうか。と考えるのである。

—たかはし・あきひさ 日本文学科准教授—